鳴門教育大学研究紀要
第26巻　2011

大学と学校の連携による四国遍路歩き実践に関する研究

―― 遍路を活かした人間形成プログラムの開発に向けて ――

梶　井　一　暁

（キーワード：四国遍路，大学と学校の連携，歩き遍路，人間形成）

1　人間形成の空間としての四国遍路への着眼

四国遍路は，われわれにとって，どのような意味や可能性の広がる空間として立ち現れるか。周知のように，空海（弘法大師）にゆかりのあると伝えられる88の寺院とそれら寺院を結ぶ約1400キロメートルにおよぶ道を含むのが四国遍路である。四国遍路が第一義的には宗教や信仰としての空間であることは言を俟たない。これに加え，四国遍路をめぐる近年の世界遺産登録をめざした機運や意識の高まりは，それが歴史や文化の空間として意味づけられるものであることを，やはり認めさせる。むろん，宗教や信仰と，歴史や文化は単純に切り離して考えることのできない要素であるから，宗教や信仰としての空間と歴史や文化としてのそれは重なりあう性格をもつ。さらに，筆者が積極的に考えるのは，教育や人間形成の空間としての意味も見出せるのではないだろうか，ということである。四国遍路歩きは，それを体験するそれぞれの者にさまざまの学びを与えるであろう。歩き遍路を試みる者は，宗教者や大人だけでない。たとえば，子どもや大学生は，普段は遍路道に足を踏みいれることはほとんどない者であろうが，彼らが歩き遍路を体験することにより，どのような人間形成作用が生じるのか。

本研究は，教育や人間形成の空間としての四国遍路の可能性に着眼し，子どもや学生の歩き遍路に関する教育実践研究を試みるものである[1)]。

歩き遍路を活かした教育実践について成果が蓄積されつつある[2)]。たとえば，学生を対象とした教育実践では，今治明徳短期大学や鳴門教育大学のものがよく知られる。前者では，遍路体験授業が2001年度から行われ，学生は４泊５日でおよそ130～150キロメートルの遍路道を歩く。学生の歩き遍路体験は，自己省察や他者理解，地域や自然への関心などの点において教育効果があったと報告される[3)]。後者でも，遍路体験授業が行われている。現在，学部と大学院の両課程に展開する全学的プログラムとして実施されている点で特色的である。学生は２泊３日で「遍路転がし」と呼ばれる難所を含む約60キロメートルを歩く。大学院で2005年度から先行的に授業科目化され，学部でも2008年度から導入された。歩き遍路体験授業を通じて，学生における援助規範意識などの道徳的意識の向上がみられたことが指摘されている[4)]。

子どもを対象とした教育実践では，鳴門教育大学・教育と学校を考える会の取り組みが，とりわけ注目される。2005年度から小・中学生の参加する「子ども歩き遍路」を実施し，とくに2007年度からは「君がお遍路プロデューサー」というテーマを掲げ，子どもの集団遍路歩き活動を展開している。５～６人の子どもで班をつくり，およそ２泊３日で遍路道を歩く。全体コースとして巡拝する寺院や泊まる宿は共通に定められているが，寺院間の道順，食事や休憩や到着の時間，小遣いの使いかたなどは，それぞれの班で子ども同士の相談によって決められる。子ども主体の決定プロセスを尊重した実践が試みられている。その実践から，子どもにおける自己決定の経験，関係性の再構築，価値観の形成などの意味が見出されると考察されている[5)]。

本研究では，以上のような歩き遍路に関する教育実践の例に学びつつ，とくにつぎのことを試みたい。すなわち，大学と地域の学校が連携し，四国遍路を活かした実践的・体験的な学びの機会を創出するため，学生や子どもが参加する歩き遍路体験プログラムの開発をめざす。具体的には，大学と高校の連携（高大連携），大学と中学校の連携（中大連携）による取り組みとして，学生や子どもの集団歩き遍路実践を試みる[6)]。

これまで，上述のように，学生や子どもに対し，歩き遍路体験の機会を提供しようとする取り組みがなされてきており，一定の成果がみられる。これらの教育実践に対し，とくに本研究で試みる大学と学校の連携による取り組みは，つぎの点で特色的である。すなわち，これまでの教育実践で重点的に考察されてきた，参加者における歩き遍路体験にもとづく地域や文化の理解の深まり，あるいは情操や意識の高まりなどの側面での効果に加え，以下のような大学や学校が抱える教育課題にも効果の波及を期そうとしている。大学生と子どもが交わる体

験を通じて，たとえば子どもにとって，先輩的な存在である学生と交流することで自身の進路やキャリアを考える機会となったり，教員志望の学生にとって，子どもを引率・支援することで子ども理解の深まりや指導力の高まりの機会となったりするような側面での効果も，教育実践のねらいに含み込もうとしているのが，本研究である。大学と学校の連携による取り組みとして歩き遍路体験をプログラム化することにより，そのねらいとして，子どもの進路指導・キャリア教育や学生の教育実践力育成を，その教育実践の視野に積極的におさめうる。大学と学校の連携により，歩き遍路体験を通じた学びを軸としつつ，よりトータルな教育実践の展開の可能性を探りうるのではないだろうか[7]。

かさねて述べておきたい。歩き遍路実践におけるこれらのねらいについては，つぎにあらためて記すものであるが，とくに子どもの進路指導・キャリア教育や学生の教育実践力育成をねらいに含めるのは，あるいは四国遍路を手段とする教育実践という印象をもたせるかもしれない。しかし，そうではない。四国遍路が有する教育や人間形成の空間としての意味を積極的に見出そうとするゆえである。多様な可能性の広がりをもって，そこを歩こうとする者を招き，応じる空間が，四国遍路ではないか。本研究は，四国遍路に対するこのような理解を基盤に据えて行おうとするものである。

2　歩き遍路実践のプログラムと様子

⑴　プログラムのねらい

学生や高校生，中学生が四国遍路のフィールドに実際に出て，ともに歩き遍路を体験する実践について，大きくつぎのようなねらいをもって実施した。

1．高大連携／中大連携
　→高校／中学校と大学が連携した人間形成プログラムの開発
2．地域理解教育
　→四国の地域文化としての遍路の歴史，文化，自然などの理解
3．情操教育
　→厳しい経験，共同活動，コミュニケーション能力，他者の理解や尊重
4．進路指導・キャリア教育
　→高校生／中学生における大学訪問や大学生交流を通じた将来の進路に向けた動機づけやイメージ形成
5．教育実践力育成
　→教育大学生の教師教育，生徒の引率，生徒理解
※留学生が参加する場合，6．国際理解教育（下記プログラム No.b，c において）

若干説明を加える。1．高大／中大連携は，高校／中学校と大学が連携し，生徒や学生の人間形成を促すような体験的・実践的なプログラムを開発することである。

2．地域理解教育は，四国の文化アイデンティティたる遍路を活かし，地域の歴史や文化，自然に対する理解を深めるための学びの機会を提供することである。

3．情操教育は，年齢や背景の異なる集団が共同で活動することにより，コミュニケーション能力や他者理解・共感能力を高め，情操や感情の涵養をはかることである。

4．進路指導・キャリア教育は，生徒と学生が交流することによって，高校生の大学進学に向けた進路意識の高揚やそのための有益な情報の収集，中学生の将来への進路に向けた動機づけやイメージ形成をはかることである。

5．教育実践力育成は，教職志望の学生が教育実習などとは異なる実践の場で生徒を引率・支援することにより，指導力を磨くとともに，生徒理解を深めることである。

6．国際理解教育は，生徒と学生が遍路文化を媒介に留学生と交流することを通じ，異文化理解や国際理解を深めることである。

これらのねらいは，たとえば，4．進路指導・キャリア教育は高校や中学校でとくに重視され，5．教育実践力育成はとくに大学で重視されるというように，大学側と高校／中学校側で強調点のおきかたの異なるねらいも

ある。しかし，いずれのねらいも大学と学校の双方で共通に理解されるところのものとして設定されている。

⑵ 実施経過

下表のように，県内外の連携校を得て，歩き遍路体験プログラムを実施した。

No.	年度	連携校	日　程	コース		参加者	連　携
a	2007	高松南高校（香川県）	2008年２月29日（１日）	【大学見学】高校生の大学訪問，AED講習，交流会		学生５人，高校生３人	高大連携
			2008年２月29日～３月２日（２泊３日）	【平道・山道】[６]安楽寺～[12]焼山寺・鍋岩	約37.5km		
b	2008	高松南高校（香川県）	2008年９月12～13日（１泊２日）	【平道】[１]霊山寺～[６]安楽寺(約15.9km)	計，約32.2km	学生９人（うち留学生２人），高校生４人	高大連携
				【山道】[11]藤井寺～[12]焼山寺・鍋岩(約16.3km)			
c	2008	羽ノ浦中学校（徳島県）	2009年２月27日（１日）	【大学見学】中学生の大学訪問，交流会		学生７人（うち留学生２人），中学生９人	中大連携
			2009年３月７～８日（１泊２日）	【平道・山道】[19]立江寺～[22]平等寺	計，約31.4km		
d	2009	三木高校（香川県）	2009年７月25日（１日）	【大学見学】高校生の大学オープンキャンパス参加，交流会		学生12人，高校生４人	高大連携 ※当年度は中高大連携として実施（d，e）
			2009年９月12～13日（１泊２日）	【平道】[１]霊山寺～[６]安楽寺(約15.9km)	計，約32.2km		
				【山道】[11]藤井寺～[12]焼山寺・鍋岩(約16.3km)			
e	2009	相生中学校（徳島県）	2009年７月25日（１日）	【大学見学】中学生の大学訪問，交流会		学生12人，中学生10人	中大連携 ※当年度は中高大連携として実施（d，e）
			2009年９月12～13日（１泊２日）	【平道】[１]霊山寺～[６]安楽寺(約15.9km)	計，約32.2km		
				【山道】[11]藤井寺～[12]焼山寺・鍋岩(約16.3km)			

⑶ 実践の様子 ―― 主に2008年度の例から ――

①高大連携による歩き遍路実践

如上の実施経過における2008年度のｂのプログラムから主に，高大連携による歩き遍路実践の様子を示す。

初日，１番札所の霊山寺（鳴門市）から６番札所の安楽寺（上板町）まで平道を歩き，安楽寺の宿坊に泊まった（写真１）。そして翌日，四国遍路随一の難所「遍路転がし」として知られる11番札所の藤井寺（吉野川市）から12番札所の焼山寺（神山町）・鍋岩までの山道を踏破した（写真２）。学生９人（留学生２人を含み，メキシコと新疆ウイグルからの留学生），高校生４人が，この32kmをこえるコースに挑んだ。

学生や高校生は地図で現在地を確認したり，声をかけあったりしながら道をゆく（写真３）。目的の寺をめざす道中，教職志望の学生は，「疲れた」という高校生にどう声をかけるといいのか，どう働きかけると効果的なのかと，考えながら歩く。引率しながら指導スキルを磨く機会である。ただ「がんばろう」と声をかけて，歩けるものでもない。もうがんばっている。自分も疲れている。もはや工夫なく，「がんばろう，あと少し」と声をかけるのが精一杯である。「あと少し」を具体的にいうことができればいいのだが，いえない。学生はコース下見をすまし，地図も確認しているにもかかわらず，いざとなると「あと800メートル行くと，大きな木のある神社があるからそこまで歩こう」，「あと15分歩くと，遍路小屋があるからそこで休もう」といえない。学生は仲間

とともに歩く遍路は，互いのサポートが大切だと気づく。自分のコミュニケーション能力の不足，言葉がけのためのひきだしの少なさ，対応の幅の小ささを痛感する。その実感は教職をめざす自身の課題に気づくことにつながる。

特別の思いをもって遍路道を歩く学生もいる。さまざまの背景が歩く者を後押しする。

> **家族への思いとともに**
>
> プログラムの最大の難所の出発点である藤井寺に到着したときは，昨晩の雨で遍路道は濡れ，さらに霧で薄暗くなっていた。遍路道への入り口は，これから先の苦難を物語っているかのようにとても神秘的に感じた。実際に歩き始めるとみんなの歩くスピードに私の体力ではついていけず，後ろのグループが追いつくまで１人で山道を歩くこともあった。果てしなく続く山の上り下りで私の体力はもちろん気力も奪われ，何度もリタイヤしようと思った。しかし，このプログラムに参加するときに決めた自分なりの目標，私のことを心配し応援してくれている家族，友人，先輩，そして何よりも私が大学３年生のときに亡くなった２人の祖父のことが頭に浮かんだ。母方の祖父は祖母と一緒に四国八十八カ所を回っており，この「遍路転がし」と呼ばれる山道を一度でいいから歩いてみたかったと，出発前に祖母がいっていたことが頭から離れなかった。祖父母の分まで私が諦めず最後まで歩かなければいけないと強く思い，最後まで歩くことができた。
>
> （大学院１年生・女／2008年度 b）

よく知られるように，「お接待」は四国遍路に特色的な習慣である。遍路道を歩く学生や生徒に地元の方が飲料やみかんを差しいれしてくれる（写真４）。とくに学生は四国４県以外の出身者も多く，接待をはじめて経験する学生や生徒のなかには，遠慮して「こんな，いただけません」と恐縮する者もいる。彼らは，接待は素直にありがたくいただけばいいものであり，地元の方に感謝し，かつ道を歩ける健康なわが身に感謝する気持ちが大切だと知る。四国という地域に伝存する生きた文化に触れる機会となる。

また，地域理解教育の一環として，参加者全員がデジタルカメラを携帯し，道中でみた遺物，草木，動物，あるいは出会った人などを，自分の視点で撮影し，晩のミーティングでパソコンを使って紹介する実践を行った（写真５）。撮影した写真の一部は，たとえば2007年度の a のプログラムにおいては，別稿で高校生の作品を紹介しているように，パネル化して学内外で展示した[8]。なお，本稿では大学生の作品を２例，文末に掲載しておく。

当年度の実践では，留学生２人の参加が得られた。そのため，国際理解教育や異文化交流のねらいも含めることができた。大学生，高校生，留学生の三者が交わる営みがみられた。たとえば，メキシコからの留学生に対し，高校生が持参した電子辞書を駆使し，寺院の歴史について説明したり，新疆ウイグルからの留学生が用意してきてくれたナンを昼食にみんなにふるまったりすることがあった（写真６，７）。ふたりの留学生は，学生や高校生とともに，安楽寺の宿坊に泊まった。そのおり，晩の勤行に対する態度の違いが示され，引率教員であるわれわれにとっても，異文化理解の助けとなった。メキシコの留学生の宗教背景はキリスト教である。彼女は勤行を文化体験ととらえて参加し，勤行の様子を写真撮影もした。他方，新疆ウイグルの留学生はイスラム教で，勤行は仏教の宗教儀式と厳然ととらえ，参加しなかった。食事制限も行った。仏教以外を信仰する者も遍路を行う。遍路者の背景や関心はさまざまであり，その多様性がそれぞれ尊重されるところに，四国遍路が国内外の多くの者を惹きつけてやまない魅力を宿していることが，よく理解された。ともあれ，強調しておきたいのは，「四国」というローカルな空間に，グローバルな交流が生起した実践となったという点である。

「遍路転がし」を歩ききり，焼山寺に着いた（写真８）。高校生から「道はきつかったけれど大学の話が聞けた」，「来年も来たい」，「今度は親と一緒に歩きたい」などの言葉を得ることができた。

②中大連携による歩き遍路実践

上掲の実施経過における2008年度の c のプログラムから主に，中大連携による歩き遍路実践の様子を示す。

歩き遍路当日にさきだって，中学生は大学を訪問し，学生の案内で施設見学を行った。学生との交流を通じた中学生の将来の進路に向けた動機づけやイメージ形成をはかるためである。中学校の教室とは規模の違うギャラリー形式で教壇や机が並ぶ大講義室，映画『眉山』の撮影が行われた食堂，蔵書の豊富な図書館などをめぐった。図書館では，中学生は自分の学校の校長やクラス担任が書いた論文を発見した。かつて校長や担任が鳴門教育大学大学院に派遣され，修士課程に学んだときに書いた修士論文である。「分厚い，何ページあるの？」，「え

［1］

［2］

［3］

［4］

［5］

［6］

［7］

［8］

っ，200ページも？」と，その力作に驚く（写真９，10）。

遍路当日は，初日，19番札所の立江寺（小松島市）と20番札所の鶴林寺（勝浦町）をめぐり，翌日，21番札所の太龍寺（阿南市）を打ち，22番札所の平等寺まで，２日間で32km をこえる道を踏破した。鶴林寺と太龍寺をめぐる道は，焼山寺の道とならんで「遍路転がし」として知られる難所である。「一に焼山，二にお鶴，三に太龍」といわれる。このコースに，学生７人（留学生２人を含み，ともに韓国からの留学生），中学生９人がチャレンジした（写真11）。

教員志望の学生が中学生を引率する。彼らは中学生と一緒に歩くなかで，どう言葉をかけたり，コミュニケーションをはかったりしたらよいのか学ぶ。「歩くの，もう疲れた」，「休憩はまだ？」という中学生に，ただ「がんばって歩こう」といって歩くものではない。「あと500メートル」，あるいは「あと15分歩くと，公園があって休憩できるからね，そこまで歩けるよね」と，具体的な目標を指し示す。あるいは周囲の自然や景色を楽しみながら，のんびりと「つぎのお寺は遠いね」とスローペースで歩を進める。そのざっくばらんな打ち解けた会話や関係のなかで，学生は，教育実習や教室では見逃してしまいそうな，フィールドに出てこその中学生の飾らない表情や行動について，思いがけず観察する機会を得ることもある。教員になろうとする学生にとって，中学生と

長時間身近に接しうる歩きは，指導力を磨き，生徒理解を深めるチャンスとなる。

当年度の実践でも留学生の参加を得ることができた。韓国からの留学生である。平道を歩き，まだ息もあがらず余裕のあるときは，道中で青空ハングル講座が開かれることがあった。「アンニョンハセヨ」，「カムサハムニダ」，「チョヌン，イルボニン，イムニダ」などと，もりあがる様子もみられた（写真12／中央の赤いジャケットの女性が留学生）。

やがて平道から，鶴林寺と太龍寺につづく山道「遍路転がし」へと進んで行く（写真13，14）。太龍寺では参拝者から声をかけられた（写真15）。

地域理解教育の一環で，高大連携の実践と同様，参加者は全員デジタルカメラを携帯して歩いた。写真は2009年度の実践からのものであるが，参加者それぞれが自身の視点で道中の情景を撮影する。大胆なローアングルで写真をとる中学生もおり，独特な視点と行動に驚かされることもある。焼山寺をめざす途中，一本杉庵（浄蓮庵）で彼が狙っているのは蟻であった。町でみる蟻よりも大きい。彼の好奇心を刺激した（写真16，17）。そして，参加者はそれぞれ，昼間に撮影した写真を，晩のミーティングにおいて，パソコンとプロジェクターを使って発表する。写真の発表者は中学１年生である。画面には愛染院で撮った猫が写る（写真18）。参加者はフィールドでの発見を仲間と紹介しあう。仲間から「あー，あった，あった，それ」や「へー，気づかなかったな，あれ」などの声があがる。参加者それぞれのセンスから，地域が観察される。

また，晩のミーティングでは，書会を開く試みもあった。あとでもう少し詳しく述べるが，参加者各自がその日歩いて感じたことを言葉にして，それを墨書で表現し，一枚の全紙に一人ひとりが順に書き込んでいくというものである。学生発案の会である。最初に筆をいれたのは男子中学生であった。真ん中に大きく「清」と書いた。写真の学生は「出会い」と書いている（写真19）。留学生のひとりはハングルで「努力」と書いた。参加した仲間全員が墨書し，１枚の共同作業の成果が生まれた。

［９］

［10］

［11］

［12］

［13］

［14］

［15］

［16］

［17］

[18]

[19]

3　歩き遍路実践の意義

実践における主なねらいとして，１．高大連携／中大連携による人間形成プログラムを開発することをめざし，２．地域理解教育，３．情操教育，４．進路指導・キャリア教育，５．教育実践力育成を含めていることは，すでに述べたとおりである。ここでは，とくに３．情操教育と，５．教育実践力育成について，その意義を述べることとする。

なお，２．地域理解教育については，以上の記述においてもやや紙幅を割いてきたところであるし，その成果の一部として学生と高校生の写真パネルを紹介している。４．進路指導・キャリア教育については，別稿で高校／中学校の観点から考察されているので，そちらを参照されたい[9)]。

⑴　教育実践力育成

教員養成の大学である鳴門教育大学において，学生の教育実践力育成は重要な教育課題である。教職志望の学生にとって，高校生や中学生をサポートしながら長い遍路道を歩いていく体験は，フィールドで生徒を引率することを通じて指導力を磨き，言葉がけや関係づくりにつとめる機会となる（写真20）。また，生徒理解を深める機会ともなり，教育実習において学校や教室で観察される生徒とは，あるいは違う側面への気づきもあるのではと期待される。

[20]

①どう言葉をかけるか

たとえば，学生のレポートによると，つぎのようなやりとりが中学生とのあいだであった。2009年度の相生中学校との連携で行った遍路実践で，初日終盤，ここまで約14キロメートル歩いてきており，宿泊予定の安楽寺が近くなってきたものの，雨が降り，体力的にも気分的にもつらくなってきているときである。

〈1〉言葉がけの工夫

話　者	会話，活動など
	体力的に厳しく，中学生Ａは疲れていた様子だった。列の最後尾を二人で歩く格好になった。
中学生Ａ	「疲れた」「遠い」と一人ごと。
学　生Ｓ	「遠いといっていても，近くはならんわな。まあ，遠くなったりもせんから安心しな」と諭す。
中学生Ａ	次第に「疲れた」という回数が減って，歩くことに集中しはじめた。

（大学院１年生・男／2009年度 e）

この学生は「われながら説教じみたセリフだと思う。けれども，中学生の気分をほぐす効果があったのか，関心や目先の転換になったのか，ペースをとりもどして歩き出した」と振り返る。「がんばって歩こう」というストレートな一言が効果的なこともあるだろうが，それだけでは生徒は動かない。学生は生徒とともに歩きつづけるなかで，言葉がけの工夫やストックを学ぶ。

②コミュニケーション能力

別の大学生は「コミュニケーション能力の大切さ」を学ぶ。彼女は，歩き遍路実践を通じ，先輩の大学院生や引率教員，あるいは留学生のあり方をみて，どう他者と関係を切り結び，働きかけるのか，その能力の大切さを考え，自身の「引き出し」や「経験」の不足を実感し，今後の課題としてもちかえってくる。以下，学生のレポートからである。

〈2〉コミュニケーション能力の大切さ

途中しんどいなあと思っても，最後までやり遂げられたのは，まわりの励ましの声，そして一緒に頑張れたメンバーがいたからだった。今回一緒に歩いたメンバーから見習いたい部分はたくさんあった。厳しい山道でも，いろんなことに興味津々でパワフルで元気な笑顔の留学生。この山道は5，6回目というお遍路マスターで，道中いろんな自分の経験談や様々な話をして場を盛り上げてくださった院生。普段は講義でしかかかわりがないけれども，人生の先輩としてたくさんのアドバイスをくれる先生。そんなメンバーとのやりとりの中で感じたのは，自分の中にたくさんの引き出しを持って，いろんな人とコミュニケーションをとれる力，すなわちコミュニケーション能力の大切さである。私も自分なりに頑張ってみたが，院生さんや先生などと話しているとやはり，自分の引き出しの少なさ，経験の少なさが感じられた。もっといろんなことを経験していたら，もっと高校生ともうまくスムーズにいろんなことを話せただろうし，ちょっと年上というだけだけれども，いいアドバイスができたのかもしれないと思った。このように今回の経験では，地域とのかかわり，人とのかかわりはもちろん，自分を見直す時間をもつこともできたと思う。

（学部１年生・女／2008年度 b）

③先輩として，助言者として，現役大学生として

学生は高校生や中学生と遍路体験をともにするなかで，いわば「ほんの少し人生のさきをゆく先輩」として，助言者の役割を果たすこともあった。

中学校の教員を志望し，「この歩き遍路を通して，中学生とたくさんかかわり，話ができればいいなと思い，参加した」という学生は，「中学生と交わす言葉」を考える。道中，中学生と会話を重ね，次第にうちとけていく。思春期にある中学生の悩みに耳を傾け，自身のかつての経験も重ねあわせ，相談にのる。自分の言葉が中学生を勇気づけることが自信となり，「言葉」の大切さを実感する。ここでの中学生とのやりとり自体はささやかな行為もしれないけれど，相手の何かを動かしたようだという実感や自信が，教員をめざす自身の資質を考えることにつながっていくことが期待される。また，中学生に対し，将来の進路としての大学について，現役大学生としてその「生」の情報を伝える。

〈3〉中学生と交わす言葉

私は中学校の教員を志望している。この歩き遍路を通して，中学生とたくさんかかわり，話ができればいいなと思い，参加した。実際に歩き始めると，最初はお互い遠慮がちなところはあったが，会話を重ねていくなかで，うちとけることができた。ひとりの女の子とは友達関係の悩みについて，一緒に考えながら歩いた。思春期の中学生にとって友達関係がいかに重要でトラブルが起きやすいかは，私も体験して知っていたため，その子のつらさは少しわかるような気がした。私が感じたことをそのまま彼女に伝えると，笑顔で「がんばる」といってくれた。自分の言葉がその子の心を動かすことができたのだと思うと，とてもうれしく思い，同時に言葉の力を改めて実感した。他の子どもたちとも大学の話を多くした。どの子も“大学”に興味があるようで，授業の様子や大学生活を聞いては「えー，すごい！」などの言葉が飛び交っていた。中学生たちには少し先の話かもしれないが，大学へ行って勉強することが夢へとつながる一つの選択肢だということを今まで以上に意識し，憧れをもっていたように思う。

（学部２年生・女／2008年度 c）

また，別の学生は遍路実践での目標として「精神的にも体力的にも辛いなかで，他人に思いやりの気持ちをもって接し，他人の親切な行為に感謝の気持ちをもつこと」と「中学生や高校生とさまざまな会話をすることで，彼らがどんなことに興味があるのかを知ったり，進路などの相談を聞いてアドバイスをしたりして親交を深める

こと」をもって参加した。後者の目標にかかわって，彼女は中学生とのやりとりのなかで，専攻の英語をいかし，中学生に英語の勉強の仕方をアドバイスし，進路の構えについても助言している。遍路の道中，語りあいながら，中学生が何に悩み，何に関心をもっているのか，生徒理解を進めていく。彼女らはうちとけて，英語でしりとりをしながら歩くこともあった。

〈4〉勉強や進路のアドバイス

話　者	会話，活動など
中学生 C	中学生の時ってどうやって英語勉強してましたか？
学　生 T	構文を頭に入れてから教科書や参考書解くようにしよったよ。
中学生 D	そうかー。いまいち勉強の仕方がわからないんですよね。高校受験も心配なんです。
学　生 T	こまめに復習したり，ちゃんと授業聞っきょったら絶対いけるよ。まだまだ時間あるしなあ。高校入るん楽しみ？
中学生 D	めっちゃ楽しみです！入りたい部活も決めてるんで。でも勉強との両立は絶対したいんですよね。高校に入ったら怠ける人いっぱいいるって聞いたんで…。
学　生 T	まあ確かに怠ける人も出てくるけどなあ。結局自分が流されんと頑張れるかどうかやと思うよ。それだけしっかり考えとったら D ちゃんは大丈夫と思うよ！

（学部 2 年生・女／2009年度 e）

④引率教員をみて

遍路実践の引率には高校や中学校の教員にも加わってもらっている。その現職教員の姿から，教職志望の学生が学ぶところは少なくない。歩き遍路では現職教員と多くの時間を共有でき，アドバイスを得たり，話を聞けたりするため，学生にとってとりわけ貴重な機会となる（写真21／左は高校教員，右は教職志望学生）。大学と学校の連携事業として具現できた実践ゆえのメリットである。下記のレポートが示すように，現職教員は生徒の質問にどう応じるのか，すぐ教えてしまうのか，どう間をとるのか，現職教員がつくる中学生との関係を，眼前でうかがうチャンスを得る。また，別の学生は，「高校の先生は生徒から少し距離を置いて後ろからじっくり見守っている」，あるいは「先生たちは支度が早い」や「食事が早い」などの姿も観察してくる。現職教員が示す何気ない行為や仕草から，学生は自身が教員になっていくための細やかなヒントを得る。

[21]

〈5〉疑問をもつ中学生，待つ先生

教師を目指す私にとって，中学生たちと歩くなかで，とても多くのことを考えさせられた。歩くなかで身近な疑問から，中学生がたくさんのことを質問してきた。私は，この大きな関心や自然に生まれる意欲を大きなチャンスと思い，いろいろなことを話した。すべて知っているわけもなく，でも，この疑問を大切にしたい気持ちでいっぱいだった。たとえば，「なぜ橋では杖をついてはいけないのだろう」と自然な発問を交えながら歩く中学生の姿は，一緒に歩いている私にもとても勉強になった。また，中学生は多くの疑問を引率の先生にも尋ねていた。先生は「なぜだろうね」といいながら，すぐには答えないで一緒にお寺をまわり，しかし最後には，しっかりとその生徒へ質問に対する内容を伝えている姿が印象深く残っている。待ちながら，でも教えることは教える，このことは教師として，何年経っても大切な姿勢であると知った。こういう経験は，直接触れ合い，活動するなかでよくみえてくると，身をもって感じた。

（大学院 1 年生・男／2008年度 c）

以上に示した学生のレポートは一部である。彼らの振り返りから，限られた観察や把握ながら，教職志望の学生にとって，高校生や中学生との歩き遍路実践が，ただその厳しく長い遍路道を歩いたという体験や感動の蓄積

や共有にとどまらず，加えてその集団的歩きの過程で切り結ばれる高校生や中学生，さらには現職教員との関係が，自身の指導力や引率力の課題への気づき，関係づくりやコミュニケーションの能力の省察，生徒理解の深まりなど，将来に向けた教職論をとらえなおす契機となっていることを，たしかに把捉できるであろう。

⑵ 情操教育

「精神的にも体力的にも辛いなかで，他人に思いやりの気持ちをもって接し，他人の親切な行為に感謝の気持ちをもつこと」。学生のひとりが歩き遍路への参加にのぞみ，据えた目標である（学部２年生・女／2009年度 e）。四国遍路の人間形成や教育の空間としての意味が，彼女の態度によく示されている。歩き遍路体験は，とりわけ集団歩き遍路として実践されるとき，参加者が厳しい体験を共有し，その共同活動を通じ，仲間の大切さや自身の内面の充実をうながす側面をもつのではないかと積極的に把握される。

歩き遍路実践による情操的涵養の効果について，心理学的データをもって考察する準備は，いまはない。しかし，興味深い実践を試みることができたので，若干の考察を行いたい。試みたのは書会である。

書会は，以上においても実践の様子を紹介するなかで簡単に言及したが，歩き遍路実践に参加した者それぞれが一日歩いた気持ちを書で表現するというものである。一人ひとりが順に一枚の全紙（150cm×90cm の和紙）に筆をいれて文字を書いてゆき，共同作品を制作する。

書会は参加学生の発案による。２回開かれ，2008年度の中大連携歩き遍路実践（c）と2009年度の中高大連携歩き遍路実践（d，e）において行われた。写真は2009年度の実践から示すものである（写真22，23）。中学生が筆をいれ，「旅人」と書いたところである。中学１年生で最年少参加者の彼は「自分も旅人の気持ちになって，２日目の遍路に挑む」と，みんなのまえで堂々と説明した。「中学生が，大学生がそれぞれ筆をいれていくのを，全員がじっと見守り，書きつけられた文字を見ておっと声をあげました。作品が完成に近づくにつれ，そこには小さな一体感が生まれていたように思います。二日間で数十 km という長い道のりをみんなで歩ききった達成感と共感が，この一枚に詰まっています」とは，書会発案学生のコメントである。

[22]

[23]

2008年度と2009年度の作品と，書会発案学生による「遍路体験と書」の解説文を下掲する。

その書をみると，①「出会い」「会」「harmony」（以上，A. 2008年度の書より），「友」「おもいやり」「ココロ」「温」「和」「愛」「人」「顔」「供（共）」（以上，B. 2009年度の書より），②「清」「苦楽」「努力（ハングル文字）」（以上，A），「成長」「前進」「挑戦」「旅人」「夢」「忍」「人生」「体力」（以上，B），③「歩」「笑」「快汗」（以上，A），「踏」「歩」「笑」（以上，B）などの字がみえる。これらの字によって表現された遍路実践者の気持ちや感情は，きわめて興味深い。学生や生徒において，ともにその厳しい体験と対峙することで，仲間を認め，他者に共感し，また自己を省察し，肯定的に状況を見据えていこうとする内面の充実が感じられていることの一端が，うかがわれるのではないだろうか。

さらに，Emotional Intelligence（情動知能）と呼ばれる「情動を知覚し，思考を助けるために利用し制御する心的能力・特性」の概念を参照していえば[10]，①の「出会い」や「友」などの字で表現された心性は「対人対応」（共感，協力，感謝）に関する心的能力・特性，②の「清」や「成長」などは「自己対応」（洞察，実行，制御）に関するそれ，③の「歩」や「踏」などは「状況対応」（洞察，対処，危機管理）のそれの醸成が，これらの文字を書きつけた者のなかであったのではないかと意味づけえよう。

大学と学校が人間形成プログラムとして開発・実践する歩き遍路は，一般の個人遍路の歩きとは異なり，個々の歩きを基本としつつも，仲間とつれだった集団的な歩きを重視する。この集団歩き遍路実践の特色が，実践者

のなかに，とくに①の「対人対応」に関する心的能力・特性を醸成するところがあったと理解される。歩き遍路実践が，他者への共感，自己の省察，状況の気づきを導く実践となる可能性が，書会の試みから示唆されうると考える。

A．2008年度の書会での作品（プログラム c）

この書は，歩き遍路に参加した二十人全員で書いた共同作品です。歩き遍路を体験して感じたり思ったりしたことを，一人ひとりが順に書き込み，一枚の全紙に表現しました。

最初に思い切って筆を入れたのは中学生の男子です。学校では書くことのないほど大きな紙に，ためらう様子もなく，力強く真ん中へ「清」という一字で表現しました。書き終えた生徒は，すがすがしい表情を浮かべていました。女子中学生も，少し恥ずかしながらも自分なりの思いを表現しています。またある留学生（韓国）はハングル文字で「努力」と表現し，ある大学生は“harmony”と軽快な筆遣いで表現しています。

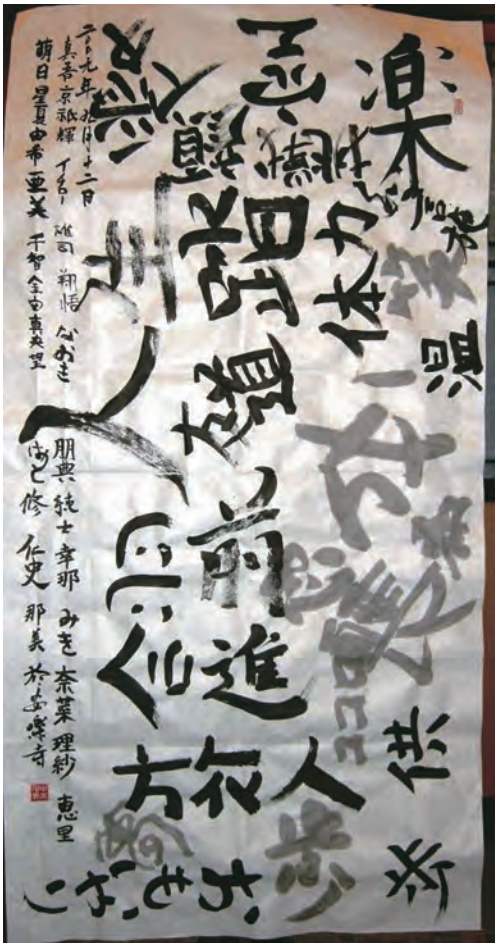
この作品から，歩く場面がみえてくるのではないでしょうか。歩くなかで綺麗だなと感じる風景を思い伝える「空」の一字，気持ちのよい汗をかけたことがわかる「快汗」など，それぞれの楽しみや苦しみ，お遍路を歩いたそれぞれの思いがにじみ出る文字で表現されています。

「一人では歩ききるのは困難な道も，みんなと一緒だったからできた」と話す中学生がいました。険しい遍路転がしの山道では，少し先を行く先頭集団から離れたメンバーへ，トランシーバーを使い，「大丈夫ですか。頑張ってください」などのやりとりがありました。地域の方や参拝者との出会いも数多くあり，「どこからきたの」「この地域では夏にお祭りをしていて，金魚の明かりを照らすけん良かったらおいで」などと心温かいお誘いもありました。歩くなかでの会話は，大学での一人暮らしへのあこがれや思春期の悩み，人気の音楽やコミック漫画への興味から空海の歴史についてと，世代を超えて色々な話題にわたりました。

一人ひとりが体験を思い返しながら書いていきました。中学生が，大学生がそれぞれ筆をいれていくのを，全員がじっと見守り，書きつけられた文字を見ておっと声をあげました。作品が完成に近づくにつれ，そこには小さな一体感が生まれていたように思います。二日間で数十 km という長い道のりをみんなで歩ききった達成感と共感が，この一枚に詰まっています。一日の思いを筆で書きとめることで，ひとつの素敵な思い出が生まれました。

（大学院１年生・男／2008年度 c）

B．2009年度の書会での作品（プログラム d，e）



歩き遍路に参加した23人で書いた共同作品です。初日の歩き遍路を通して感じたことや思ったこと，また二日目の焼山寺まで歩ききる意気込み等を一枚の全紙に表現しました。墨は，濃墨と淡墨の２種類用意して，書く人の好みでどちらかの墨を選んで書いています。

「旅人」と書いた中学生は，「自分も旅人の気持ちになって，二日目の遍路に挑む」と笑顔で答えてくれました。また「おもいやり」と書いた高校生は，「遍路道を歩きながら，皆が励まし合い，思いやりを持って歩くことができた」という思いからこの言葉を選んだそうです。この作品から，遍路道を歩くいくつもの場面が目に浮かんでくるのではないでしょうか。歩く中で見上げると広がる情景を思いおこさせられる「空」の一文字や，「人生は遍路なり」という言葉にもあるように「人生」と書いたそのどれもが，一つひとつ力強く，のびのびとした筆遣いで表現されています。

参加者の中には「一人で歩ききるのは大変な道も皆と一緒だったから楽しく歩くことができた」と話す者もいました。険しく見通しの悪い山道では，先頭集団から後ろを歩く仲間へトランシーバーを使い，「いまどこですか，大丈夫ですか？」や「もうすぐ，あと500m の案内板がありますよ」などのやり取りもありました。また，地域の方からのお接待や参拝者の方から声をかけられることもあり，遍路道を歩く自分が一人ではなく，多くの人とのつながりや，かかわりのなかにあることが強く感じられました。

「踏」の文字を書いた大学生は，「この遍路道は，空海をはじめ，たくさんの人達が踏んで歩いてきた道。私たちも踏んで歩き，これからもたくさんの人たちがこの道を踏んで歩いていくのだと改めて感じた」と語りました。普段の学校での生活とは違い，実際に歴史薫るお遍路の道を歩いたなかで感じたことは，わたしたちにとってまた一つ有意義なものとなりました。

白紙だった紙にそれぞれの思いで，濃淡の溢れる言葉が書きつけられることによって，この作品は創り上げられていきました。最後には落款も書き入れて作品が完成したときには，中学生と高校生と大学生という境界は消え，それぞれがともに歩いた「一お遍路さん」として，あたたかい感情を共有できていたように感じられます。この作品には，お遍路を通しての23人の気持ちがひとつに詰まっています。　（大学院２年生・男／2009年度 d，e）

4　課題

⑴ 〈体験〉のもちかえりと展開

学生や生徒が体力的にも精神的にもタフな歩き遍路の体験を共有する。その体験は，書会で認められるように，

学生や生徒における情操や内面の充実をうながす。また，その体験は，学生にとっては，生徒の引率や理解の機会となり，生徒にとっては，将来の進路への動機づけの機会ともなる。こうした実践の意味を，少なくともそれを体験している最中，あるいはその余韻の残る後日しばらくのあいだにおいては，おそらく認めうると思う。しかし，果たして彼らによってもちかえられた体験は「お遍路後」，どのような展開的な意味を生成していくのか。

たとえば，教員をめざす学生にとって，四国遍路というフィールドで観察・理解された生徒の姿は，教育実習やボランティアでみるような学校や教室において彼らがみせる姿とどう関連し，違いがあるならその多面性をどう考え，自身の教職論の構築や教育実践の基礎として活かしていくのか。教員をめざす自身におけるトータルな学びのなかで，歩き遍路実践の体験はどう位置づくのか。

生徒にとって，歩き遍路実践をきっかけとして，どのように自己を肯定したり，とらえなおしたりする態度や，他者に共感したり，感謝したりする気持ちや行動につながるのか。あるいはそのような学校教育的な情操・道徳面における変化がすぐにみられなくても，「大学生と話をした」や「仲間と一緒に歩いた」という体験が，その後の学校生活のなかでどのような文脈で思い起こされたり，振り返られたりしていくのか。単発的なイベントにおける，単なる満足感や充実感におわらない「その後」の追跡調査は，大学と学校の連携における課題である。

⑵ 〈体験〉の客観化とそのデータ

以上に引用してきた学生や生徒のレポートや参与観察コメント，写真，あるいは書会での作品は，歩き遍路実践の体験が参加者に与えた影響や意味を考えるための有効な手がかりのひとつとなる。しかし，そのデータとしての主観的限界はまぬがれえない。以上に示した実践の成果を，課題含みの結果として振り返ることが求められる。対象をとらえなおすための客観的データとの突きあわせが必要である。Emotional Intelligence の概念や POMS（Profile of Mood States）分析は[11]，その有効なデータ収集のアプローチとなると考えられる。プログラムの改善へつなげていきたい。

【註】

1）以下，原則「学生」というとき，大学生や大学院生を含んで呼称する。本研究における遍路体験に関する活動には，大学生や大学院生，あるいは留学生が参加している。学生の別をとくに区別する必要がある場合は「大学生」や「大学院生」，そうでない場合は「学生」と記す。同様に，「生徒」は中学生と高校生を含む呼称である。必要がある場合は「中学生」や「高校生」と記す。

2）近年の四国遍路を中心とする巡礼研究動向について，真野俊和による「従来のように歴史学や宗教学，民俗学などの分野だけでなく，教育学分野にまでウィングを広げようとしているところに，着実かつ意欲的な発展をみとめることができるであろう」という把握がある。真野俊和「書評と紹介　浅川泰宏著『巡礼の文化人類学的研究』」『宗教研究』83－1，2009年，pp.245。

3）市川ひろみ「『地域文化論（歩き遍路体験学習）』授業報告書 ―― 結願までの道のり ――」今治明徳短期大学（未刊行），参照。

4）田村隆宏・南隆尚「大学院生の道徳的意識に及ぼす遍路体験の影響」『教育実践学論集』10，2009年，参照。

5）鳴門教育大学　教育と学校を考える会編『「出会い，かかわり，生きてゆく」体験活動』同会，2008年，参照。また，藤原伸彦・山﨑洋子・居上公美子「子ども歩き遍路」（鳴門教育大学戦略的教育研究開発室編『遍路文化を活かした地域人間力の育成・報告書』鳴門教育大学，2010年，pp.50－63）も参照のこと。

6）2008年，鳴門教育大学は徳島県藍住町と包括的交流協定を結んだ。これにもとづき，同町教育委員会との連携により，小学生対象の歩き遍路体験プログラム「遍路ウォーク」についても，2008年度と2009年度に実施した。その考察については，伴恒信・岩嵜毅・松田紳吾・久保晶子・宮内宏子「藍住町小学校との連携プログラム『遍路ウォーク』」（鳴門教育大学戦略的教育研究開発室編『遍路文化を活かした地域人間力の育成・報告書』鳴門教育大学，2010年，pp.26－39）を参照のこと。

7）連携校である中学校と高校の観点からの考察については，鳴門教育大学戦略的教育研究開発室編『遍路文化を活かした地域人間力の育成・報告書』（鳴門教育大学，2010年）に収録される下記を参照されたい。片山純州「中大連携による歩き遍路」（pp.77－84），山田憲治「高大連携による歩き遍路実践」（pp.85－90）。

8）山田憲治「高大連携による歩き遍路実践」，鳴門教育大学戦略的教育研究開発室編『遍路文化を活かした地域人間力の育成・報告書』，鳴門教育大学，2010年，p.90，参照。

9）前掲，註7）片山論文，山田論文，参照。
10）皆川直凡「心理学からみた遍路体験，その人間形成的意義」，鳴門教育大学戦略的教育研究開発室編『遍路文化を活かした地域人間力の育成・報告書』，鳴門教育大学，2010年，pp.17－25，参照。
11）南隆尚「歩き遍路に向き合う学生へのアプローチ」，鳴門教育大学戦略的教育研究開発室編『遍路文化を活かした地域人間力の育成・報告書』，鳴門教育大学，2010年，pp.40－49，参照。

【付記】本稿は，2007－2009年度の文部科学省・現代的教育ニーズ取組支援プログラム「遍路文化を活かした地域人間力の育成」による成果の一部である。その報告書である鳴門教育大学戦略的教育研究開発室編『遍路文化を活かした地域人間力の育成・報告書』（鳴門教育大学，2010年）に収録される「大学と学校の連携による歩き遍路実践」（pp.64－76，梶井執筆）を修正・加筆したものである。

本研究の実施にあたり，山田憲治先生（香川県教育委員会），片山純州先生（那賀町立相生中学校），山森直人先生（鳴門教育大学），内藤隆先生（鳴門教育大学）から特段のご支援を賜った。また，市川ひろみ先生（今治明徳短期大学）から未刊行論文をご提供いただくご高配を賜った。とくに記して謝意を表したい。

本稿に掲載される写真は，本研究においてのみ使用することを，プログラム参加者から許可されるものである。

【補録】2007年度の歩き遍路実践における写真パネルの大学生作品の例である。向かって左の作品は「遍路道のゴミ」，右の作品は「ハーモニー，人・動物・自然の調和」をテーマにしている。他に3作品あるが，ここでは略す。

Experiences of the Shikoku Pilgrimage (Henro) in Students

—— a Practical Study in Regional Culture in University–Secondary School Partnership ——

KAJII Kazuaki

(Keywords : Shikoku Henro, pilgrimage, university–secondary school partnership, teacher education, culture of sentiments)

The aim of this study is to try a cooperative study and practice on the Shikoku Pilgrimage (Henro) on the basis of connection of Naruto University of Education with high schools and junior high schools in the Shikoku region and to examine meanings of experiences of the pilgrimage in students at the university and secondary schools. Programs on the pilgrimage were conducted four times in 2008－2009 and about sixty students tried the pilgrimage in a group and walked over thirty kilometers including hilly parts for a couple of days.

It is pointed out the following matters through this study. First, experiences of the pilgrimage in a group may have effects on awareness of self–affirmation and empathy in students. After the pilgrimage, the practices, which each participant tried to express their feelings and impressions on their own experiences of pilgrimages by means of Kanji and Kana characters written with a brush and sumi ink, were attempted. Characters written by them were, for example, those of meaning ‘friend’, ‘encounter’, ‘face’, ‘heart’, ‘love’, ‘kindness’, ‘warmth’, ‘harmony’, ‘challenge’, ‘development’, ‘advance’, ‘effort’, ‘dream’. The result of the practices may show that sentiments in participants were cultivated partly. Second, it is a matter for teacher education for university students. The pilgrimage as the practice provided a good opportunity for university students becoming teachers to lead secondary school students and broaden their understanding about students. It became a chance for university students to develop their teaching skills and abilities in the field. Third, I note a meaning of the practice from a point of view of career education for secondary school students. With contacts among participants consisting of students in several education stages, high school students had chances to get practical information on university life from active university students directly and junior high school students got information on high school life from high school students. Through the collaborative practice with the university and secondary schools, students had more incentives for the advanced learning.